

消せない灯

町は消えてしまうのか
20年で人口はさらに半減

「消滅可能性自治体」。次の世代の人口を左右する20〜39歳の女性が、令和22年までの40年で5割以下に減る可能性がある自治体を指す言葉です。5年前に日本創成会議が打ち出し、全国市区町村の半数、896自治体が指定されました。福智町の人口減少は予想を上回る速さで、合併時2万6千人いた人口は、この先20年で約半数の1万2千人まで落ち込むと言われています。今後は存亡危機の地方と、人口が集中する都市部の極点化が加速すると考えられています。解決策は「まちづくりで交流人口や関係人口を増やす」「移住で定住人口を増やす」しかありません。確かなビジョンを持ち、町全体で取り組まなければ「消滅」の足音はすぐそばまで近づいています。

逆転の鍵は施策と理解
挑戦と支えが未来を拓く

町の財政は財源が歳出に追いつかず、創意工夫をこらし最小の経費で最大の効果を挙げなければ10年以内の「財政再建団体」を覚悟しなければならぬ状況です。「鉛筆一本買うのにも国の許可がある」と例えられる再建団体。町の自主性は失われ、徹底的な歳入確保・歳出削減が求められます。その時一番に影響を受けてしまうのが住民のみなさん。負担は増加し「住みにくいまち」になるのは疑いようありません。福智町誕生から13年、合併による特例措置は終わりを迎え、ひとり立ちの時が近づいています。今後は本当に必要な物を判断する、事業や施設の「選択と集中」が打開のカギとなります。そのためにはこの町の人すべての意識改革が必要です。「なんとかなる」と樂觀的でも事態は変わらなず「何をしても無駄」と悲觀的になっても未来は開けません。町をあげた逆転へ。好転するための後押し、転落させない支えを行う「人の力」が地方の活性化を生み出していきます。



「まち・ひと・しごと創生総合戦略」は、人口急減・超高齢化に対し、各地方それぞれの特徴を活かした自律的で持続的な社会創生を目指す指針です。平成27年に「第1期福智町総合戦略」を策定し、政策の骨子としてきました。今年度は5か年計画の最終年として第2期目の計画を策定中。第1期での目標達成状況を踏まえ、地方創生に向けたより具体的な方針を検討します。

壁を越え地方創生の取り組みが生んだ町の拠点



長年図書館がなかったこの町に、最新設備を導入した複合施設は「不要」との声もありました。しかし旧赤池町役場をリノベーションし魅力的な空間を創出したことで、開館3年で来館者40万人にせまる町を代表する施設に成長しました。この施設の一番の特徴は「図書館は静かな場所」というイメージを覆す、私語が自由にできるということ。そのことで気軽に立ち寄れる多くの人の居場所として愛されています。これからも利用者のニーズに合うイベントや官・学・民の連携が生まれる町の拠点でありたい。地方創生事業の先駆けとして誕生した「ふくちのち」は、まちの一つの未来を作ったとも言えるのではないのでしょうか。

特集 逆転 立ち上がる。何度でも 終

人口減少、財政危機。町が抱える多くの課題。灯をともしつづけるのは、一人ひとりの意識と協力、そして挑戦を止めない強い意思。全住民の力がまちづくりを支えています。